

野ばら

小川未明

大《おお》きな国《くに》と、それよりはすこし小《ちい》さな国《くに》とが隣《と
な》り合《あ》っていました。当座《とうざ》、その二つの国《くに》の間《あいだ》に
は、なにごととも起《お》こらず平和《へいわ》でありました。

ここは都《みやこ》から遠《とお》い、国境《こっきょう》であります。そこには両方
《りょうほう》の国《くに》から、ただ一人《ひとり》ずつの兵隊《へいたい》が派遣
《はけん》されて、国境《こっきょう》を定《さだ》めた石碑《せきひ》を守《まも》っ
ていました。大《おお》きな国《くに》の兵士《へいし》は老人《ろうじん》でありまし
た。そうして、小《ちい》さな国《くに》の兵士《へいし》は青年《せいねん》でありま
した。

二人《ふたり》は、石碑《せきひ》の建《た》っている右《みぎ》と左《ひだり》に番
《ばん》をしていました。いたってさびしい山《やま》でありました。そして、まれにし
かその辺《へん》を旅《たび》する人影《ひとかげ》は見《み》られなかったのです。

初《はじ》め、たがいに顔《かお》を知《し》り合《あ》わない間《あいだ》は、二人
《ふたり》は敵《てき》か味方《みかた》かというような感《かん》じがして、ろくろく
ものもいりませんでしたけれど、いつしか二人《ふたり》は仲《なか》よしになってしま
いました。二人《ふたり》は、ほかに話《はなし》をする相手《あいて》もなく退屈《たい
いくつ》であったからであります。そして、春《はる》の日《ひ》は長《なが》く、うら
らかに、頭《あたま》の上《うえ》に照《て》り輝《かがや》いているからでありました。

ちょうど、国境《こっきょう》ののところには、だれが植《う》えたということもなく、
一株《ひとかぶ》の野《の》ばらがしげっていました。その花《はな》には、朝早《あさ
はや》くからみつばちが飛《と》んできて集《あつ》まっていた。その快《こころ
よ》い羽音《はおと》が、まだ二人《ふたり》の眠《ねむ》っているうちから、夢心地
《ゆめごち》に耳《みみ》に聞《き》こえました。

「どれ、もう起《お》きようか。あんなにみつばちがきている。」と、二人《ふたり》は
申《もう》し合《あ》わせたように起《お》きました。そして外《そと》へ出《で》ると、
はたして、太陽《たいよう》は木《き》のこずえの上《うえ》に元気《げんき》よく輝
《かがや》いていました。

二人《ふたり》は、岩間《いわま》からわき出《で》る清水《しみず》で口《くち》を
すすぎ、顔《かお》を洗《あら》いにまいますと、顔《かお》を合《あ》わせました。

「やあ、おはよう。いい天気《てんき》でございますな。」

「ほんとうにいい天気《てんき》です。天気《てんき》がいいと、気持《きも》ちがせいせいします。」

二人《ふたり》は、そこでこんな立《た》ち話《ばなし》をしました。たがいに、頭《あたま》を上《あ》げて、あたりの景色《けしき》をながめました。毎日《まいにち》見《み》ている景色《けしき》でも、新《あたら》しい感《かん》じを見《み》る度《たび》に心《こころ》に与《あた》えるものです。

青年《せいねん》は最初《さいしょ》将棋《しょうぎ》の歩《あゆ》み方《かた》を知《し》りませんでした。けれど老人《ろうじん》について、それを教《おそ》わりましてから、このごろはのどかな昼《ひる》ごろには、二人《ふたり》は毎日《まいにち》向《む》かい合《あ》って将棋《しょうぎ》を差《さ》していました。

初《はじ》めのうちは、老人《ろうじん》のほうがずっと強《つよ》くて、駒《こま》を落《お》として差《さ》していましたが、しまいにはあたりまえに差《さ》して、老人《ろうじん》が負《ま》かされることもありました。

この青年《せいねん》も、老人《ろうじん》も、いたっていい人々《ひとびと》でありました。二人《ふたり》とも正直《しょうじき》で、しんせつでありました。二人《ふたり》はいっしょうけんめいで、将棋盤《しょうぎばん》の上《うえ》で争《あらそ》っても、心《こころ》は打《う》ち解《と》けていました。

「やあ、これは俺《おれ》の負《ま》けかいな。こう逃《に》げつづけでは苦《くる》しくてかなわない。ほんとうの戦争《せんそう》だったら、どんなだかしれん。」と、老人《ろうじん》はいつて、大《おお》きな口《くち》を開《あ》けて笑《わら》いました。

青年《せいねん》は、また勝《か》ちみがあるのでうれしそうな顔《かお》つきをして、いっしょうけんめいに目《め》を輝《かがや》かしながら、相手《あいて》の王《おう》さまを追《お》っていました。

小鳥《ことり》はこずえの上《うえ》で、おもしろそうに唄《うた》っていました。白《しろ》いばらの花《はな》からは、よい香《かお》りを送《おく》ってきました。

冬《ふゆ》は、やはりその国《くに》にもあったのです。寒《さむ》くなると老人《ろうじん》は、南《みなみ》の方《ほう》を恋《こい》しがりました。

その方《ほう》には、せがれや、孫《まご》が住《す》んでいました。

「早《はや》く、暇《ひま》をもらって帰《かえ》りたいものだ。」と、老人《ろうじん》はいいました。

「あなたがお帰《かえ》りになれば、知《し》らぬ人《ひと》がかわりにくるでしょう。やはりしんせつな、やさしい人《ひと》ならいいが、敵《てき》、味方《みかた》というような考《かんが》えをもった人《ひと》だと困《こま》ります。どうか、もうしばらくいてください。そのうちには、春《はる》がきます。」と、青年《せいねん》はいいました。

やがて冬《ふゆ》が去《さ》って、また春《はる》となりました。ちょうどそのころ、この二つの国《くに》は、なにかの利益《りえき》問題《もんだい》から、戦争《せんそう》を始《はじ》めました。そうしますと、これまで毎日《まいにち》、仲《なか》むつまじく、暮《く》らしていた二人《ふたり》は、敵《てき》、味方《みかた》の間柄《あいだがら》になったのです。それがいかにも、不思議《ふしぎ》なことに思《おも》われました。

「さあ、おまえさんと私《わたし》は今日《きょう》から敵《かたき》どうしになったのだ。私《わたし》はこんなに老《お》いぼれていても少佐《しょうさ》だから、私《わたし》の首《くび》を持《も》ってゆけば、あなたは出世《しゅっせ》ができる。だから殺《ころ》してください。」と、老人《ろうじん》はいいました。

これを聞《き》くと、青年《せいねん》は、あきれた顔《かお》をして、「なにをいわれますか。どうして私《わたし》とあなたとが敵《かたき》どうしでしょう。私《わたし》の敵《てき》は、ほかになければなりません。戦争《せんそう》はずっと北《きた》の方《ほう》で開《ひら》かれています。私《わたし》は、そこへ行って戦《たたか》います。」と、青年《せいねん》はいい残《のこ》して、去《さ》ってしまいました。

国境《こっきょう》には、ただ一人《ひとり》老人《ろうじん》だけが残《のこ》されました。青年《せいねん》のいなくなった日《ひ》から、老人《ろうじん》は、茫然《ぼうぜん》として日《ひ》を送《おく》りました。野《の》ばらの花《はな》が咲《さ》いて、みつばちは、日《ひ》が上《あ》がると、暮《く》れるころまで群《むら》がっています。いま戦争《せんそう》は、ずっと遠《とお》くでしているので、たとえ耳《みみ》を澄《す》ましても、空《そら》をながめても、鉄砲《てっぽう》の音《おと》も聞《き》こえなければ、黒《くろ》い煙《けむり》の影《かげ》すら見《み》られなかったのであります。老人《ろうじん》はその日《ひ》から、青年《せいねん》の身《み》の上《うえ》を案《あん》じていました。日《ひ》はこうしてたちました。

ある日《ひ》のこと、そこを旅人《たびびと》が通《とお》りました。老人《ろうじん》は戦争《せんそう》について、どうなったかとたずねました。すると、旅人《たびびと》は、小《ちい》さな国《くに》が負《ま》けて、その国《くに》の兵士《へいし》はみなごろしになって、戦争《せんそう》は終《お》わったということを告《つ》げました。

老人《ろうじん》は、そんなら青年《せいねん》も死《し》んだのではないかと思《おも》いました。そんなことを気《き》にかけながら石碑《せきひ》の礎《いしづえ》に腰《こし》をかけて、うつむいていますと、いつか知《し》らず、うとうと居眠《いねむ》りをしました。かなたから、おおぜいの人《ひと》のくるけはいがしました。見《み》ると、一列《れつ》の軍隊《ぐんたい》でありました。そして馬《うま》に乗《の》ってそれを指揮《しき》するのは、かの青年《せいねん》でありました。その軍隊

《ぐんたい》はきわめて静肅《せいしゆく》で声《こえ》ひとつたてません。やがて老人《ろうじん》の前《まえ》を通《とお》るときに、青年《せいねん》は黙礼《もくれい》をして、ばらの花《はな》をかいたのであります。

老人《ろうじん》は、なにかものをいおうとすると目《め》がさめました。それはまったく夢《ゆめ》であったのです。それから一月《ひとつき》ばかりしますと、野《の》ばらが枯《か》れてしまいました。その年《とし》の秋《あき》、老人《ろうじん》は南《みなみ》の方《ほう》へ暇《ひま》をもらって帰《かえ》りました。